

巻頭言

「新年を迎えて」



日本赤十字社臨床検査技師会
副会長 畑中 宗博 (北見赤十字病院)

会員の皆様には、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。また、日頃より日本赤十字社臨床検査技師会に対しまして、格別のご支援、ご理解ご協力を賜り深く感謝申し上げます。

早いもので、若輩、微力であること重々自覚しておりながら、永きに亘り支え育ていただいた赤臨技、会員皆様のお役に少しでも立てるなら、恩返しできればとの思いで、副会長の拝名をお受けして半年が過ぎようとしております。振り返れば、三浦会長の下、常務理事、理事の皆様と共に充実した赤臨技活動を目指し、また、充実した活動とは何かを問い、方針を施策して参りましたが、今になって、その責任の重さ、現在の医療環境・状勢を踏まえた検査室運営、その難しさを痛感、再認識しているところであります。まだまだ力不足ではございますが、本年も皆様のお役に立てるよう、会員相互の橋渡しとなれるよう、尚一層の努力、精進を重ねてまいりますので何卒よろしくお願いいたします。

さて、昨年未曾有の大震災、そして、その影響と困難多き年となりました。また、命に携わる者として心病む一年でもありました。遅ればせながら巻頭言に際し、被害を受けられた皆様、今尚、心病まれる皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

千年に一度と言われる大震災、悲惨な状況がメディア等で報じられる中、全国多くの日赤施設より医療チームが早期に編成され、現地に逸早く派遣され災害医療活動を行う姿は、同じ赤十字施設に勤める者として、頼もしくもあり、頭が下がる思いでもありました。また、日赤が全国組織であることを改めて認識する場面でもあり、広く国民にその活動・事業内容が伝わる機会でもあったかと思えます。過去

数年の業務研修会、責任者会議では、人材育成、各検査室の取組みにテーマを絞りパネルディスカッション形式にて開催してまいりましたが、本年は三浦会長の提案もあり、地域災害拠点病院の多くを担う全国日赤施設を踏まえ、災害医療下での検査室、災害に備え検査室として何ができるか、何をしておかなければならないのかをテーマに業務研修会を企画できればと思案、思索しているところであります。今の日本列島、世界各国での異常気象、天変地異、いつ何がどこで起こっても不思議ではない状況です。検査室経営・運営もしかしりですが、何においても備えあれば憂いなしかと思えます。大きな災害を、経験を機に、今後へ繋げる努力こそ経験を活かす本意なのではないでしょうか。昨年の業務研修会は、開催中止となりましたが、本年はより多くの会員皆様の参加を期待しております。

そして、本年4月に予定される診療報酬改訂の改定率は、ネットで0.004%のプラス改訂(??)。これはプラス改訂なのでしょう(??) 横ばいでしょうか(??) 施設によってはマイナスとも分析される状況かと思えます。各施設におかれましては、再度、検査室運営(経営)について分析、議論し、意識統一を図り、在るべく検査室、必要とされる検査室を目指して頂きたいと思えます。赤臨技としましても医療環境、行政の変化を把握分析した上での活動、事業展開を考えております。また何より、会員皆様のご発想、ご意見が、活発かつ有意義な活動を生むものと信じております。どうか忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。よろしくお願いいたします。

最後になりますが、平成23年7月16・17日の両日、金沢市において第18回日赤検査学術大会が開催され盛況にて閉幕いたしました。ご準備頂きました金沢赤十字病院、福井赤十字病院の検査部皆様、ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

本年が会員皆様にとって飛躍の年となりますよう、また、本会を介し、会員相互のお付き合いがより活発になりますことを願い、皆様の積極的な赤臨技活動への参画とご協力をお願いいたします。